西田維則の訳解について
——日本近世期における中国白話小説翻訳の様相——

中村　綾

キーワード：西田維則、中国白話小説、通俗もの、詩詞韻文箇所の翻訳態度、白話語彙の挿入

はじめに

日本の近世期には中国語の学習ブームが起こり、その学習教材として『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』などの多くの白話小説が読まれ、翻訳も手掛けられた。それらがやがて上田秋成や滝沢馬琴などの読本小説で翻案に利用されていったことは周知の通りである。

その近世期の白話流行の比較的早い時期に西田維則が手掛けた訳解と見なされるものには次のものが挙げられる。

・『通俗西遊記』初編（第一回から二十六回まで）
宝暦八（一七五八）年刊。口木山人訳、

・『通俗隋煬帝外史』
宝暦十（一七六〇）年刊。近江贅世子訳。

・『通俗赤縄奇縁』
宝暦十一（一七六一）年刊。近江贅世子訳。

・『通俗金翹伝』
宝暦十三（一七六三）年刊。
訳者は本書のどこにも名を表していないが、『享保以後大坂出版書籍目録』に西田維則とある。

・『画本西遊全伝』初編（第一回から二十九回まで）
文化三（一八〇六）年刊。
口木山人訳、吉田武然校

『通俗隋煬帝外史』『通俗赤縄奇縁』の翻訳者とされる近江贅世子については、中村幸彦氏が「訳者贅世子は諸資料を合わせると、西田維則。近江の人で京住。字子孝、称幸庵（又は幸安）、口木子とも号して、明和二年歿、享年未詳。」と述べている。口木子を二字にして「呆子」とし、子を山人にかえて「口木山人」

「呆山人」と号したことから『通俗西遊記』初編の訳者「口木山人」も贅世子のことか、と言及しつつも、この点については「これは今後の精査を待つこととする」としている。(1)

近世期、『西遊記』は翻訳に重点を置いた『通俗西遊記』と挿入画に重点を置いた『画本西遊記』との両方が手掛けられ、それぞれが四、五回に渡って交互に刊行された。この両翻訳が交互に訳解が刊行された運びについては磯部彰氏に詳しい言及がある。(2)また、『通俗西遊記』初編と『画本西遊全伝』初編は同じ「口木山人」の訳解と見なされているが、この両書を見比べると訳し方に違いが見られ、同一人物による翻訳と見なすには疑問が生じる点が見受けられることは拙稿に指摘がある。(3)

本稿ではここに挙げた白話小説の翻訳（通俗もの）の訳解態度を比較することで、これらの訳解は同一人物の手によるものであるのかを検討してみたい。比較するのは詩詞韻文の訳解態度と白話語彙の挿入という両側面の技巧から行うこととする。

一　詩詞韻文の訳解態度

先に挙げた西田維則の訳解とされる通俗ものの中で、『通俗隋煬帝外史』は『新鐫全像通俗演義隋煬帝艶史』（以下『隋煬帝艶史』）の翻訳で隋の煬帝の生涯を小説化したもの、『通俗赤縄奇縁』は『醒世恒言』第三の「売油郎独占花魁」の翻訳である。『通俗赤縄奇縁』は、宋末、金の来寇による社会の混乱を背景に、貧しい油売りの青年秦重が誠意を尽くした末に臨安の花街きっての名妓王美（莘瑶琴）と結ばれる物語の訳解で、日本の近世期には非常に好まれ、『通俗赤縄奇縁』以外にも複数の翻訳が手掛けられた。(4)『通俗金翹伝』は『金雲翹伝』の訳解で、良家の娘である王翠翹が父の危難を救うために遊女に身を売り、復讐を遂げ、最後は許嫁の金重や家族と再会する物語を訳したものである。『通俗西遊記』は言うまでもなく『西遊記』の翻訳である。

講釈に起源を持つ中国の白話小説は、小説として刊行された書にも講釈師の語りのスタイルを踏襲した韻文調の情景描写や登場人物の身の上の描写などが随所に設けられている。上記『隋煬帝艶史』、「売油郎独占花魁」、『金雲翹伝』にも詩詞韻文による描写が各巻に散見される。しかし、日本近世期の翻訳ものでは、講釈師による語りのスタイルを排除し、小説調の地の文に改めるスタイルのものも少なくない。また、ストーリーの展開に支障を来さないと翻訳者が判断した詩詞韻文箇所は翻訳されない、という方針が共通しているのであるが、『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄奇縁』、『通俗金翹伝』では詩詞韻文箇所をどのように訳しているのか見てみたい。以下に例を挙げていく。(5)

①『隋煬帝艶史』

只見一箇少年宮女、在那裏捲珠簾。見了文帝來、慌忙把鉤兒放下、似垂柳般磕了一箇頭、走將起來、低了眼、斜倚著錦屏風站住。文帝走近前、仔細一看、只見那宮女生得花容月貌、百媚韆嬌、真箇是

笑春風三呎花、驕白雪一團玉。
凝疑秋水為神、瘦認梨雲是骨。
碧月充作明珰、輕煙剪成羅縠。
不須淡抹濃描、別是內家裝束。
文帝見了這箇宮女、不覺心窩裏亂蓬蓬癢將起來。忍不住問道、妳是幾時進宮的、怎麼再不見承應。那宮女見文帝問他、不敢不應、因答道、賤婢乃尉遲迴的孫女、…

『通俗隋煬帝外史』
文帝走リヨリテ看玉ヘバ。花ノ容月ノ貌アリテ。百眉千嬌ヲ具ヘケレバ。覚ヘズ心ヲ動カシ玉ヒ。你ハ誰が家ノ女子ナルヤト問玉ヘバ。妾ハ乃尉遲迴が孫女ナリト答フ。…

原拠である『隋煬帝艶史』に韻文調で描かれる美女の容姿は、通俗では省略され、文帝が女官を目に留めるとすぐに思わず声を掛け素性を尋ねる運びとなる。

②「売油郎独占花魁」
王九媽賺了若干錢鈔、歡喜無限、美娘也留心要揀箇知心著意的、急切難得。
正是
易求無價寶，難得有情郎。
話分兩頭。卻說臨安城清波門裡，有箇開油店的朱十老，三年前過繼一箇小廝、也是汴京逃難來的、姓秦名重。

『通俗赤縄奇縁』
王九媽ハ許多ノ金銀ヲ得。心中ニ歡喜限リナク。他ヲ愛スルコト。一件ノ寶貝ノ如ク。王美モ也心ヲ留テ過活ヲナシ。暗ニ身ヲ任スベキ客ヲ擇ミケレドモ。更ニ意ニ称フ者モナカリケル。コノ時臨安白青波門ノ遍ニ。一個ノ油店ヲ開ケル。朱十老ト云者アリ。三年前ニ。一個ノ小廝ヲ過經トナセリ。コノ小廝モ。也汴京ヨリ難ヲ逃レテ来リタル者ニテ。姓名ヲ秦重ト云。

ここでは原文にある「正是」以下の詩詞韻文が訳解『通俗赤縄奇縁』では略されている。

③『金雲翹伝』
詞曰
冷語怕黃昏、淒淒獨閉門、展轉愁無寐、酸辛淚有痕、單衾薄枕、誰共又誰溫。任他好事、好事消磨盡、只索挑燈倩影、廝伴香魂、君君、那個承思、笑從翡翠疏簾出、香在芙蓉小殿焚。
右調月兒高
話說翠翹對景懷人、師了一首情詩、要寄與金重、匆匆不得其便。捱了幾日、恰好王員外要領帶妻女並兒子到至親人家去上

壽、翠翹探知、托病不行。候父母弟妹出門之後、忙收拾下幾味佳肴、一壺美酒、先自到後花園來、要尋見金生。…

『通俗金翹伝』

コレヨリ幾日過テ後。一日王松合家ノコラス。親類ノ家ニ。筵席（フルマヒ）ニ出ケレバ。翠翹ハ病ニ托（カコツケ）テ家ニノコリ。大家裏ヲ出ルヲ候テ。酒餚ヲトヽノヘ。後園ニ走リユキ。墻ノ上ヨリ金重ガ書齋ヲ眺望レバ。…

ここは第三回冒頭箇所であるが、原拠にある最初の韻文は通俗では省略され、「コレヨリ幾日過テ」から物語が始まり、王松が金重の書斎を眺めるところから話が始まる。

このように、『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄奇縁』、『通俗金翹伝』ではどれも詩詞韻文箇所の翻訳は省略するという共通の傾向が見られた。尚、これらの通俗ものの解題には、「訳し方は、原本に多く見える詞、詩の類で省略したものは多い。[6]」、「詩詞はすべてを翻訳せず、適宜取捨選択してある[7]」などと書かれるものもあるが、どの訳解も、省略されていない詩詞韻文は手紙の本文であったりするものばかりで、これらは省略すると物語の展開が分からなくなるため必要上残されたものである。翻訳者の詩詞韻文の訳解を省略するか否かの取捨選択には方針が見て取れるかと思われる。

先述のように、中国の白話小説は講釈に起源を持ち、講釈師の語りのスタイルがそのまま小説の本文に組み込まれ、情景描写などが詩詞韻文で語られたりするのであるが、日本でそれを訳す際には、詩詞韻文箇所を省略して小説体の文体に書き改める方針が『通俗三国志』、『通俗漢楚軍談』などから確立されていた。通俗もの（白話小説の訳解）の嚆矢とされるこれらの訳解で確立されたこの方針は、『通俗忠義水滸伝』など近世期に影響の大きかった訳解でも同様に取り入れられていたため、詩詞韻文の訳を省略するという翻訳態度は近世期の翻訳のスタイルとしては珍しくないものである。そのため、詩詞韻文の翻訳を施さないことが西田維則の特徴とすることはできないが、例えば『通俗赤縄奇縁』と同じく「売油郎独占花魁」の訳解である『通俗古今奇観』では詩詞韻文も訳されているため、韻文を訳すか否かは訳解者の方針であり、翻訳者を考察する際には一つの目安になるかと思われる。

以上、西田維則の手掛けた訳解と見なされる諸作品からは共通して詩詞韻文の訳解を省略し、小説調のスタイルの訳解となっていることが確認された。

次節では白話語彙の挿入という観点からこれらの訳解を比較検討し考察を加えてみると、注5で述べたように『通俗西遊記』初編、『画本西遊記』初編には他の訳解作品とは異なる特徴が見受けられることを述べていく。

二　白話語彙の挿入

次に白話語彙の挿入という観点から西田維則が手掛けたとされる訳解を見てみたい。

『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄奇縁』、『通俗金翹伝』には、次のように中国の白話小説の典拠には見られない白話語彙の挿入が散見される。

款待

①『隋煬帝艶史』

煬素是个年奸巨猾、見煬帝儀文隆重、情意綢繆、其中動静早已参透几分、因自忖道…

『通俗隋煬帝外史』

煬素ハ原来（モトヨリ）一个ノ老奸ナレバ。コノ款待（クハンタイ）ノ厚キヲ看。已ニ煬帝ノ心中ヲ量リ知リ。心ノ裏ニヲモヒケルハ。…

②「売油郎独占花魁」

王九媽連連稱謝、是日備飯相待、盡醉而別。後來西湖上子弟們又有一掛枝兒、單説那劉四媽説詞一節、

劉四媽、你的嘴舌兒好不利害、便是女隨何、雌陸賈、不信有這大才。説着長、道着短、全沒些破敗、就是醉夢中、被你説得醒、就是總名的、被你説得呆。這個烈性的姑姑、也被你説得他心地改。

再説王美娘自聽了劉四媽一席話兒、思之有理。…

『通俗赤縄奇縁』

王九媽ハ…劉四媽トトモニ楼ヲ下リ。酒食ヲ備テ款待（クハンタイ　モテナシ）シ。厚ク礼ヲ述テ回シケリ。王美ハ劉四媽カ説話（モノガタリ）ヲ聞シヨリ。深クソノ理ニ伏シ。…

①、②ともに白話小説原文には見られない「歓待」という白話語彙が訳解に挿入され、『通俗赤縄奇縁』では「モテナシ」と意味を表すルビも付されている。

造化

①「売油郎独占花魁」

愛你生得齊整、把做個親女兒相待。你長成之時、包你穿好喫好、一生受用。瑤琴聽説、方知被卜喬所騙、放聲大哭。

『通俗赤縄奇縁』

你ガ生得（ウマレツキ）標致（ヒヤウチ　キリヤウ）ナレバ。你ヲ親女兒トナシテ看顧（カンコセハニスル）スベシ。你ガ一生ノ造化（ザウクハ　シアハセ）ヲ得サセント云ヘバ。瑤琴ソノ時方（ハジメ）テト喬ニ瞞カレタルヲ知リ。声ヲ放テ哭叫ブ。…

②『金雲翹伝』

翠翹聴了嘆道、可怜可怜。生做萬人妻、死做無夫鬼。紅顔薄命、一至於此、我今該上前看那碑記是怎麼寫的。三人遂轉過一湾流水、半扇小橋、到了墓前、見那碑上青苔長滿、翠翹上前拂草細看。認出是校書劉淡仙墓。

『通俗金翹伝』

ソノ時翠翹ト息ヲツキ。アハレナルコトカナ。生テハ万人ノ妻トナリ。死シテハ夫ナシノ鬼（ユウレイ）トナル。カヤウノ**造化低（フシアハセ）**モアルコトカ。イザヤカシコニユキテ看ントテ。三人トモニ渓ノ上ナル小サキ橋ヲ渡リ。墓ノ前ニ立ヨリテ。石碑ノ上ナル苔ヲハラヒオトシテ看レハ。校書劉淡仙墓トアリ〳〵ト鐫（エリ）ツケタリ。

③『金雲翹伝』

天下負吾。此去自落好處安身。也未可知願父母不必為我過慮。其母大哭道…

『通俗金翹伝』

モシ天ノアハレミアラバ。マタ**造化（シアハセ）**ノ日モアルベシ。必過慮（アンジスゴシ）ヲナシ玉フナ。母親云。…

これらについても「歓待」同様、白話小説原文には見られない「造化」という白話語彙が挿入されており、②では「造化低」で「フシアハセ」とルビが振られている。

商議

①『隋煬帝艶史』

楊素徐以手挽住説道、殿下請起、何必如此、我非不爲殿下設謀、但恐一動手、便成千古罪人、且謾謾再作**計較**、煬帝道、

『通俗隋煬帝外史』

楊素徐（シズカ）ニ挽住（ヒキトヾメ）テ曰。我計（ハカリコト）ナキニアラズ。但一タビ手ヲ動カサバ。千古ノ罪人トナランコトヲ恐ル。且謾ク**商議（シヤウギ　サウダン）**ヲナスベシ。煬帝曰。…

②「売油郎独占花魁」

本心不願嫁他、只把個嫁字兒哄他心熱、撒漫使錢。比及成交、却又推故不就。

『通俗赤縄奇縁』

本心ニハ他ガ家ニ嫁スルコトヲ願ハズ。只嫁ヲ要ムルヲ以テ他ヲ哄キ。他ハコレヲ眞トナシ。多ノ金銀ヲ費ヤシ。已ニ從良ノ**商議（シヤウギ　ダンコウ）**ヲナス時ニ至リ。故ニ推テ終ニ成ラズ。

③『金雲翹伝』

原来這薄倖専一販賣人口。充作客人。討人家女兒婢妾。名色爲妻。帶到馬頭上。住落飯店。自然有人替他發賣。那黒臉鬍子。乃人肉行中經紀。替客媽来看人。議定財禮銀二百四十両。二百到薄倖。四十到主人家與中人。

『通俗金翹伝』

原コノ薄倖ハ。専人口ヲ販賣(ヒサキウル)ヲ生理(スギハイ)トナシ。常ニ客人ノ打扮ヲナシ。四方ニユキテ人ノ女子妾ヲ討メ。偽ハリテ妻子(ニョウボウ)トナシ。馬頭(フナツキ)上ニ逗留シ。ソノ夥計(ナカマ)ト商議(サウダン)ヲナセバ。自然ニ来リテコレヲ買者アリ。コノ黒漢(クロキオトコ)ハ。乃チ夥計(ナカマ)ノ人肉經紀ニテ。客媽ト云ヘル者ノタメニ。来リテ翠翹ヲ看。薄倖ト商議(サウダン)ヲナシ。財禮銀二百四十両ニ定メ二百両ヲ薄倖ニ遞シ。四十両ヲ旅館ノ主人ト。黒漢トニ分チタルナリ。

①は原文では「計較」となっている箇所が『通俗隋煬帝外史』では「商議」と語が書き替えられている例である。②、③は翻訳にはオリジナルに「商議」という語が挿入されている。

標致

①「売油郎独占花魁」

九阿姐家有幾個粉頭、那一個赶得上你的脚跟来、…

『通俗赤縄奇縁』

今九阿姐ノ家ニ。幾個ノ粉頭アレドモ。那個(タレ)カ你ガ標致(ヒヤウチ　キリヤウ)藝能ニヲヨブ者アラン。

②『金雲翹伝』

金生神為色奪。暗暗銷魂道。這相思索害也。又暗暗立誓道。我不得二女為妻。終身不娶。

『通俗金翹伝』

金重心ノ裏ニ思フヤウ。姐ト云ヒ妹ト云ヒ。聞シニマサル標致(キリヤウ)ナリ。我モシコモ二人ノ女ヲ妻トナサズンバ。一生老婆(ニョウボウ)ハモツマジト。ヒソカニ心ニ誓ヲタテ。…

①、②ともに訳解文に「標致(ヒヤウチ　キリヤウ)」という語がオリジナルに挿入されている。

看顧

①『金雲翹伝』第十回

你若要跟我做生意、我另眼看待你、你若不顧跟我。我却一个出得銭的主児。

『通俗金翹伝』第十回

你モシ我ニ跟ヒテ生意ヲナサントオモハヾ。我意ヲツケテ看顧（セハ）ヲナスベシ。モシ我ニ跟フコトヲ願ハズンバ。又別家ニ賣アタユベシ。

②「売油郎独占花魁」

愛你生得齊整、把做個親女兒相待。你長成之時、包你穿好喫好、一生受用。瑤琴聽説、方知被卜喬所騙、放聲大哭。

『通俗赤縄奇縁』

你ガ生得標致（ヒヤウチ　キリヤウ）ナレバ。你ヲ親女兒トナシテ看顧（カンコ　セハニスル）スベシ。你ガ一生ノ造化（ザウクハ　シアハセ）ヲ得サセント云ヘバ。瑤琴ソノ時方テト喬ニ瞞カレタルヲ知リ。声ヲ放テ哭叫ブ。

…

①の訳解文に見られる「看顧（セハ）」に当たるのは原文では「看待」である。また、②の訳解文に見られる「看顧（カンコ　セハニスル）」に当たる原文の語は「相待」である。これらは原文と語を替えて「看顧」という白話語彙を訳解文で使用している例である。また、①の例では、先に例に挙げた「標致（ヒヤウチ　キリヤウ）」という語も挿入されている。

これらの例から『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄奇縁』、『通俗金翹伝』には「款待」「造化」などの白話語彙が原文の該当箇所には見られないところで使用されていることが判る。

原文にはない白話語彙を挿入して使用する手法は、同時期である宝暦七（一七五七）年に初編が刊行された『通俗忠義水滸伝』にも見られるものである。『通俗忠義水滸伝』の訳解では「生意（あきなひ）」、「房間（へや）」など『水滸伝』原文には使用されることのない新しい時代の白話語彙を挿入して使用していること、「商議」、「歓待」などは原文の語を差し替えたり挿入したりして頻繁に使用されていることなどをかつて拙稿で指摘した。[8] また、これらは当時の中国語辞書であった唐話辞書の類に記載が見られるもので、このことから『通俗忠義水滸伝』の訳解には元唐通事であった岡島冠山の関与が推察されること、ここには当時日本で流行していた中国語学習（唐話学習）の気運に衒学性を示すねらいがあったものであることも同稿で言及した。そして『通俗忠義水滸伝』では「造化」、「標致」などの語も原文にはない箇所で訳解文が好んで使用されている。

西田維則の手掛けた訳解と見なされている『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄奇縁』、『通俗金翹伝』は、元となった中国側の白話小説が『水滸伝』よりも新しい時代のものであることもあり、原文に「生意」、「房間」などの語が使用されているという違いはあるが、『通俗忠義水滸伝』と『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄奇縁』、『通俗金翹伝』との間に多くの共通する白話語彙の挿入という技巧が見られることは興味深い。

一方で『通俗西遊記』初編、『画本西遊全伝』初編にはこのような傾向は見受けられない。次のように原文に「造化」の語が使用されていても通俗や画本になると訳解に反映されていない例も見られる。

『西遊記』（『西遊證道書』）

只見正當中有一石碣、碣上鐫着花果山福地水簾洞洞天。石猴喜不自勝、復瞑目蹲身、跳出水外、打了兩箇呵呵道、大造化、大造化。衆猴圍住問道、裏而怎様、水有多深、石猴道、没水没水、原来是一座鐵板橋、橋那邊是一座天造地設的家當。衆猴道、怎見得是個家當。石猴笑道、這股水乃是橋下冲貫石竅倒掛下来、遮閉門戸的。橋邊有花有樹、是一座石房、房内有石鍋、石竈、石碗、石牀凳。中間一塊石碣、鐫着花果山水簾洞、真個是我們安身之處。我們都進去住也。

『通俗西遊記』

正當中ニ一ツノ石碣アリテ。花果山福地水簾洞洞天ト十字ヲ鐫（エリ）ツケタリ。石猴看オハリテ。又瀑布（タキ）ノ外ニ跳リ出。衆ノ猴ニムカヒテ。具ニコレヲ語リ。真ニコレハ我等ガ安身ノ處ナリ。彼コニ在テ住居セバマタヨカラズヤト云ヘバ。…

『画本西遊全伝』

其傍に石碣あり。華果山福地水簾洞洞天といふ十字を鐫つけたり。橋を渡りて行ば数歩朗らかにして人家の住居に同じ。石猴見終りて再び瀑布の外に跳り出。群猴にむかいしか〳〵のさまを物語り、是の我輩（わがともがら）安居のすべき究竟の處なり。（我にしたかひ瀑布の中へ来れやとて…）

日本の近世期の訳解文には、原文にはない白話語彙の挿入を施す技法が一定の通俗ものに見られる。それらの中には、当時の最新の白話の知識であったものも少なくないことから、そこには訳解者の衒学性を誇示する意図が反映されているように見受けられることは先述の通りである。宝暦期は白話小説の訳解に当たることのできる人物は限られていたと思われ、その中で西田維則が手掛けたとされる『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄奇縁』、『通俗金翹伝』には同時期の翻訳である『通俗忠義水滸伝』と共通する白話語彙の挿入という技法が見られることは留意すべき事柄であると思われる。

一方で近世期の訳解の中には、翻訳者によっては原文にはない白話語彙を訳解に挿入する技巧を用いないものもある。本節では『通俗西遊記』初編、『画本西遊記』初編には白話語彙の挿入という技巧が取り立てて見受けられないことを述べた。

これらのことを併せ考えると『通俗西遊記』初編、『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄奇縁』、『通俗金翹伝』、『画本西遊記』初編はいずれも西田維則の手掛けた訳解であると先行研究では考えられているが、その特徴を整理すると『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄

奇縁』、『通俗金翹伝』には見られた白話語彙の挿入が『通俗西遊記』初編、『画本西遊記』初編には見られなかった。

『通俗西遊記』初編、『画本西遊記』初編については拙稿に考察があり[9]、この両書はどちらも西田維則の訳解と考えられているが、見比べると異なった解釈や人名の記述などが見られることから同一人物の施した訳解と考えるには疑問が生じることを指摘している。また、『通俗西遊記』の解題で初編の翻訳者を西田維則と考えることについて中村幸彦氏は「これは今後の精査を待つこととする」と述べ、慎重な姿勢を示されている。

これらの点と本節で指摘した『通俗西遊記』初編、『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄奇縁』、『通俗金翹伝』、『画本西遊全伝』初編に見られる特徴からは、『通俗西遊記』初編と『画本西遊全伝』初編は他の三点の訳解と同じ人物が手掛けた訳解であるのかを再検討する余地が生じるように思われる。

おわりに

本稿では中国白話小説の特徴である詩詞韻文調による描写の翻訳態度と訳解文に原文にはない白話語彙を挿入するという訳解態度の二つの側面から、西田維則の翻訳と考えられている作品について訳解者を考察した。

その結果、『通俗西遊記』初編と『画本西遊全伝』は他の訳解作品に見られる白話語彙の挿入という特徴が見受けられないことを指摘した。かつて拙稿で考察したことと併せて考察すると、近世期の『西遊記』の訳解ものを手掛けた人物には不明な点が残され、再検討の余地があると考えられる。

また西田維則の訳解とされる作品の中で『通俗隋煬帝外史』、『通俗赤縄奇縁』、『通俗金翹伝』には共通する白話語彙を挿入するという訳解態度が見られた。また、これは岡島冠山が大きく関与したと考えられる『通俗忠義水滸伝』と共通する訳解の手法である。

宝暦期という白話小説の訳解の歴史の中ではまだ着手されたばかりのこの時期の訳解にタイムリーな白話語彙を挿入して使用する態度が見受けられることは、この時期に白話小説の訳解に携わった人物を考える上でも手がかりになるであろう。

西田維則は和刻本「小説三言」に訓点を施した岡白駒と交流があった人物と目されている。そして岡白駒は岡島冠山と関与があったと目されている人物である。日本で中国白話小説の訳解が着手され始めたこの時期に、白話を訳する能力のあった限られた人物たちの訳解の軌跡や交流には不明な点も多く残されており、本稿で指摘したことを手掛かりとして、今後も考察を進めていきたい。

注

（1）　中村幸彦氏『近世白話小説翻訳集』第一巻解題（『通俗隋煬帝外史』の項）（汲古書院、一九八四年）。

（2）磯部彰氏『『西遊記』受容史の研究』（多賀出版、一九九五年）、同氏『旅行く孫悟空　東アジアの西遊記』（塙書房、二〇一一年）。

（3）拙稿「『通俗西遊記』初編と『画本西遊全伝』初編―両書の依拠テキストをめぐって―」（『和漢語文研究』第十九号、二〇二一年十一月）。

（4）『通俗繍像新裁綺史』（寛政十一（一七九九）年写）、『通俗古今奇観』（文化十一（一八一四）年刊）。

（5）『通俗西遊記』初編、『画本西遊記』初編の詩詞韻文も翻訳では省略される同じ傾向が見られるが、第二節ではこの『西遊記』の翻訳二種は西田維則の翻訳と考えるには疑問点も生じることを述べるため、ここでは詩詞韻文の翻訳態度を示すことは略することとする。

（6）注（1）に同じ。

（7）日野龍夫氏『近世白話小説翻訳集』第二巻解題（『通俗金翹伝』の項）（汲古書院、一九八四年）。

（8）拙著『日本近世　白話小説受容の研究』第一部第二章（汲古書院、二〇一一年）。

（9）注（3）に同じ。

本稿では引用に際しては字体はなるべく原本に忠実な字を使用した。ただし、略字は正体字に改めてある。